

イエス―罪の世に輝く御国の王

(ヨハネ一八・二八〜一九・一七)

先週の土曜、訪問の帰りに「宝島」に寄った。久しぶりの宝探しだったが、うぶ出しと思しき照明器具が二つあったので購入した。壊れていたスイッチを直し、磨きをかけてみると、実によい。しかしこの良さをSNSで発信するのは容易なことではない。フルオートで撮れば「ノッペラボー」な感じになってしまうからだ。そこでシャッタースピードや露出に気を配り、光と影を映しこむ。そんなことをやっている、ふつとヨハネ福音書の冒頭、「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」を思い出した。今朝の箇所はイエスの裁判として有名な箇所であるが、そこに見えてくるのは光と闇の対決である。死に向かつて一人歩むイエスの周りには人間の罪という漆黒の闇が広がっている。以下イエスの周りにあった人の罪の性質について考えたい。

一、ユダヤ人たちの「我執」

イエスの裁判は捕縛の後にすぐに

はじまった。大祭司の中庭での裁きの後、イエスは時のローマ総督、ピラトのもとに送られた。時は明け方。翌日は過ぎ越しの祭りであり、安息日だから裁判はできない。しかし彼らは諦めなかった。その執着はすさまじいものであった。彼らは一睡もせずにピラトに詰め寄り、「十字架につける」とシユプレヒコールの声をあげ、イエスの無罪を確信するピラトをカイザルの敵だとして脅しをかけ、最後には憎き支配者であるカイザルに忠節を尽くしたのである。目的のためには手段を選ばない。彼らの中にあつたのは自分たちのメンツを奪つたナザレのイエスを殺そうという恐ろしい執着心であり、それを実現させるためには神への忠誠や律法への忠実など最早どうでもよいものだった。まったく罪深いとはいえないようがない。

二、ピラトの「脆弱」

次はピラトである。使徒信条の「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」でおなじみの彼であるが、この箇所で見ると彼がイエスの十字架刑に積極的に加担したとはおおよそ言えないことが分かる。ピラトはイエスの無罪を知っていたし、何とかしてそのことをいぎり立つユダヤ人たちに知らせようとしたし、イエスの釈放に向け

て努力をしたとヨハネは語っている。しかし彼はイエスを釈放することはなかった。その権威が彼に与えられていることは彼自身が証言している。しかしそうしなかったのだ。なぜか。彼が弱かったからである。ユダヤ人たちに脅された彼は自己保身に走り、正しいことを行うことができなかつたのだ。彼は何をなすべきかを知っており、その権威もあつたのだ。しかし、それを行えない弱さをもっていた。こう考えればこの種の弱さもまた一つの罪だと言える。

三、民衆の「無定見」

夜通し行われたイエスの裁判を見ていた人の中にはいわゆる市井の人々が居たことは確実である。彼らはユダヤ人指導者たちの扇動にのり、「除け、除け、十字架につける」と叫びたてた。だがこれはユダヤ人の指導者に正しく教化され、熟慮した結果としての行動では決してない。むしろその場のノリに支配された無定見な付和雷同の結果と考えるべきだ。考えてみよう。この叫びの五日前、多くの民はしゅろの葉を敷いてイエスをエルサレムに迎え「ホザナ、ホザナ、ダビデの子」と叫んだはずである(一二・一二〜一五)。しかし彼らはいとも簡単にオルグされた。そしてイエスを死へ向かわす運命の車輪が回り始めると、彼らは臆するどころか喜々

としてその車の上で踊つたのである。死刑場をさえエンタテイメントに変える。ここに人間の罪を見ることはさして難しいことではない。

* * *

ユダヤ人の我執、ピラトの脆弱さ、そして群衆の無定見ぶり。こうした人間の罪の諸相は、イエスという光によって照らし出され、イエスは十字架につけられることになった。だがこれでは一時ではあれ「闇が光を飲み込んだ」という瞬間が起こってしまう。ヨハネ福音書はそう読まれることを嫌っている。光は、たとえそれがどんなに小さくとも常に闇に勝っている。これがヨハネの神学である。その音がよく聞こえてくるのが一九・一七。そこには「イエスは自分で十字架を負つて」とある。無理やり負わされたのでも、殺されたのではない。イエスはこの罪の深い闇を切り裂き、すべての呪いを断ち切るために、自ら進んで十字架の横木を担がれたのである。それがこの福音書記者の意図である。そこにあるのは使命に燃えた目、鉄のごとき意志、そして首尾一貫した姿勢である。この闇に勝つ御国の王、イエスの光は私たちにも与えられている。このイエスの光を暗き罪の世に輝かせようではないか。